

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00838

研究課題名（和文）ユーザー視点による中国語教育文法設計の方法論構築—項目の分散化と説明の平易化—

研究課題名（英文）An method for Designing Chinese Pedagogical Grammar from the users' perspective: Deconcentration of Grammatical Items and the Simplification of Explanations

研究代表者

鈴木 慶夏（Suzuki, Keika）

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：80404797

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：これまで中国語教育で利用してきた文法体系は、中国語学における学術的重要性を色濃く反映したものであったため、昨今の教育環境の変化（学習者と教授者の多様化、学習者の中国語学習に対する動機が多様化、第二外国語中国語カリキュラムの縮小化傾向等）に対応できず、教育現場の負担は過大であった。

本研究は、このような環境変化に対応可能な教育用途の文法体系を確立すべく、文法項目の分散化と文法説明の平易化を実装する中国語教育文法の設計方法を構築するために、複数の文法項目をとりあげ分析と考察を重ねた。最終的に、本研究課題が掲げる中国語教育文法は、その枠組みを文法シラバスとして反映できることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、教育環境の変化に対応可能な文法体系はどうあるべきかという問いを立て、中国語教育における文法観を問い直して、(1)教育文法は、中国語の規則や規則性を学習するというより、学習者が文法事項を実際に使うために存在すること（「使う」とは、所与の文型や表現形式を具体的な場面や状況に適切に位置づける行為を指す）、(2)教育文法は、学習者が learner というより user としてコミュニケーションをとるための文法上の情報を整理したものという点を示し得た。

同時に、初級・中級・上級どの到達レベルでも、学習条件に合わせた文法教育が可能になる道を拓いたという点で社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：The tertiary Chinese language education environment in Japan has changed over the last two decades. The changing circumstances are partly reflected in the diversification of both learners and teachers of Chinese as a foreign language (CFL), CFL students' motivation to learn Chinese, and the CFL curriculum. In a grammar-focused approach, CFL instruction is facing the issue of how Chinese grammar should be taught under new teaching and learning conditions. Our research project discussed the concept of "Chinese pedagogical grammar" as a new framework for CFL and aimed to propose a new syllabus with a supporting example such as Chinese comparative expressions. Compared to a mainstream pedagogical framework for CFL based on Chinese linguistic grammar, our new framework is conducive to students' communicative needs and is better aligned with the current foreign language education policy and pedagogical conditions in tertiary institutions in Japan.

研究分野：中国語学・中国語教育

キーワード：教育文法 ユーザー視点 コミュニケーション 文法項目の分散化 文法説明の平易化 文法シラバス

1. 研究開始当初の背景

これまで中国語教育で利用してきた文法体系（以下「従来の文法」と呼ぶ）は、学習時間の減少等によるカリキュラムの多様化、学習者・教授者の多様化という教育環境の時代的变化に対応できず、以下の諸点で学習効果をあげられない状況にあった。

(1) 初級の文法項目が多すぎる。近年、第二外国語カリキュラムは、週2コマ→1コマ、2年→1年、選択科目化等、縮小化傾向が目立ち、かつて文法の解説に割いていた時間は大幅に減少している。従来の文法では、初級の文法項目が多すぎ、例えば、比較文という文法項目には、初級で導入される関連表現に多くの学習者が混乱し、基本的な文型さえ正確な文をつくれぬ現象が指摘されていた。

(2) 文法の説明方法が難しすぎる。従来の文法は、中国語学の重要な学術的論点である「文の終止性」や「文の成立可否」、即ち、どういう条件を満たせば文として正確に成立するかという、文法研究者の視点からの説明に偏りがちであった。しかし、学習者が知りたいのは、どういう時にその表現を使うかという説明であるため、従来の文法での説明方法は学習者には抽象的すぎるうえに理解し難く、習得上の大きな困難になっていた。

(3) 学習者・教授者の多様性に対応できない。日本語教育文法を論じた先行研究では、「読んだり書いたりする必要がない学習者や、中級以上の日本語能力を必要としない学習者など、学習者の多様性に対応する必要がある」との指摘があるが、中国語教育も同様の状況にあり、昨今は、学習者の動機や目的が多様化している。

教授者の多様性も特筆すべき点である。国内の外国語教育の中で、中国語教育は、中国語を母語とするネイティブ教員の占める割合が高い。その一方で、海外の中国語教育と比べると、日本の中国語教育は、日本語を母語とするノン・ネイティブ教員の割合が高い。教授者の研究的バック・グラウンドも多様性を極め、中国語学以外に、文学・歴史・哲学・政治等の専門分野をもつ者も多い。教授者の母語の種類や専門領域が原因となり、従来の文法を担当クラスでどう教授すべきか現場で苦慮する者も多かった。

2. 研究の目的

そこで、本研究課題は、学習者と教授者の多様化、学習者の中国語学習に対する動機が多様化、第二外国語中国語カリキュラムの縮小化がもたらすカリキュラムの多様化等、様々な教育環境において文法教育の学習効果をあげられる中国語教育文法（pedagogical grammar）の設計を推進するために、その基盤となる教育文法の設計方法の構築を最終目標とし、次の研究目的を設定した。

(1) 学習時間や学習目標に応じて、何を先に学習し何を後で学習するか取捨選択できるようにする。

(2) 中国語学文法論の専門知識をもたない者でも文法説明を容易にできるようにする。

3. 研究の方法

本研究課題は、教育文法の設計方法構築を目的とするが、研究期間内で全ての文法項目を

記述するのは不可能であるため、以下の方法を採用した。

(1) 先行研究でも指摘され、かつ、教育現場でも問題が顕著な文法項目を優先してとりあげる。

(2) その中でも、学習効果が低い文法項目を分割・整序し、初級で学習可能な文法項目を分散化して、初級レベルで学習すべき文法項目/学習しなくてよい文法項目を特定する。

(3) 学習者が理解しにくい説明概念を特定し、説明の平易化を図る。

(4) (1)-(3)の研究過程では、日本語教育文法にかかわる研究方法や研究成果を適宜参考にした。

また、研究途中の段階で、日本中国語学会や中国語教育学会等でワークショップを開催し、ひろく中国語教育従事者から学術的・実践的な意見やコメントを得ることも重視した。

4. 研究成果

(1) 例えば、比較表現のように、従来の文法では到達目標とは無関係に、平叙文・否定文・疑問文等の関連表現を網羅し、一つの文法項目として扱ってきた表現形式について、ある到達目標を達成するにはどういう表現形式が必要とされるか/されないかという観点から、最初に学習すべき表現、学習時間に余裕がなければ学習しなくてもよい表現、学習時間に余裕があれば学習可能な表現というように、「比較」に用いられる表現形式をあらためて整序した。

(2) コロナ禍の影響を受け、もともと予定していた学習者調査が能わなかったため、学習者調査の実施にあてるはずだった時間を文法シラバスの設計に投入したことで、予定外ではあったが、(1)で得られた結果を文法シラバスとして設計することができた。その結果、例えば、初級で文法項目A・Bは教授すべきであるが、文法項目CやDは教授せず(いついつまで)後回しにできるというように、教育環境の条件に応じて教授者が学習対象を選択できる方法を示した。

(3) (1)(2)で記述した成果を将来的な発展可能性という点から、今後の展望を述べると、初級レベルはもちろん、最終的には、中級・上級も含めたどの到達レベルでも、学習期間・学習時間、学習者の目的等、学習条件に合わせた文法教育が可能になる道を拓いたことを指摘できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Suzuki Keika, Nishi Kaori, Furukawa Yutaka, Nakata Satomi	4. 巻 2021
2. 論文標題 A proposal for a pedagogical grammar syllabus in tertiary Chinese language education in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers of L2 Chinese Language Education:A Global Perspective. Routledge.	6. 最初と最後の頁 126 ~ 143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4324/9781003169895-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 張恒悦
2. 発表標題 日本人学習者に見られる数量詞不使用の傾向について
3. 学会等名 ワークショップ「日本語母語話者のための中国語教育文法を考える 数量詞をどう学ぶか 」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木慶夏
2. 発表標題 日本語の使用実態への気づきから始める練習試案
3. 学会等名 ワークショップ「日本語母語話者のための中国語教育文法を考える 数量詞をどう学ぶか 」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中田聡美
2. 発表標題 中国語初級学習者に必要な文法的、語用論的知識とは？ 動詞を用いた“口馬”疑問文に対する応答表現から考える
3. 学会等名 ワークショップ「日本語母語話者のための中国語教育文法を考える 応答表現をどう学ぶか 」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西香織
2. 発表標題 語用論的観点からみた疑問詞疑問文に対する応答表現－中国語初級学習者に教えるべき表現とは－
3. 学会等名 ワークショップ「日本語母語話者のための中国語教育文法を考える 応答表現をどう学ぶか(2)」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木慶夏
2. 発表標題 ユーザー視点の中国語教育文法が提供すべき情報とは 学習者の“是……的”構文使用状況から
3. 学会等名 中国語教育学会2020年度第3回研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 張 恒悦
2. 発表標題 語法点引入時の話題と場景区別 以教材中差比句的处理為例
3. 学会等名 中国語教育学会2020年度第3回研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩田一成
2. 発表標題 データから見る日本語比較表現の実態
3. 学会等名 中国語教育学会2020年度第3回研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西香織
2. 発表標題 データから見る中国語比較表現の実態
3. 学会等名 中国語教育学会2020年度第3回研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清原文代
2. 発表標題 「比べて選ぶ」ための教案 “ 貨比三家 ” ネットショッピングサイトを利用して学ぶ
3. 学会等名 中国語教育学会2020年度第3回研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中田聡美
2. 発表標題 中国語初級教科書における語気助詞の扱いを再考する 語気助詞 “ 口巴 ” を例に
3. 学会等名 中国語教育学会2020年度第3回研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古川裕
2. 発表標題 多機能語の感性的教授法について “ 把 ” のコアイメージを例として
3. 学会等名 中国語教育学会2020年度第3回研究会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 張 恒悦
2. 発表標題 感情動詞と“了”の共起関係について
3. 学会等名 中国語教育学会第17回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古川裕
2. 発表標題 従本体理論語法到教学応用語法的意識転変
3. 学会等名 漢語語法研究和教学新進展国際研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木慶夏
2. 発表標題 中国語学的文法と中国語教育文法の現状と課題
3. 学会等名 第69回日本中国語学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田一成
2. 発表標題 日本語学的文法と中国語教育文法の現状と課題
3. 学会等名 第69回日本中国語学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 張 恒悦
2. 発表標題 漢語差比句の偏誤問題
3. 学会等名 第69回日本中国語学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西 香織
2. 発表標題 從使用者角度談語法項目的編排 以“差比句”為例
3. 学会等名 第69回日本中国語学会全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西 香織 (Nishi Kaori) (70390367)	明治学院大学・教養教育センター・教授 (32683)	
研究分担者	中田 聡美 (Nakata Satomi) (80783183)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・講師 (14401)	
研究分担者	張 恒悦 (Zhang Hengyue) (70411171)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・特任准教授(常勤) (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古川 裕 (Furukawa Yutaka) (90219105)	大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・教授 (14401)	
研究分担者	清原 文代 (Kiyohara Fumiyo) (90305607)	大阪府立大学・高等教育推進機構・教授 (24403)	
研究分担者	岩田 一成 (Iwata Kazunari) (70509067)	聖心女子大学・現代教養学部・教授 (32631)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関